

『暗記じゃなくて考えたら、日本史はこんなにおもしろい』 小泉秀人

山川出版／2023年6月／2,200円（税込）

表題のようなことを生徒に気づかせたい、そんな授業をやりたい…と思う歴史教員は多いことだろうが、なかなかそういう授業は成立しない。なぜだろうか？

この本を読んで気づかされた。教員が「考えさせたい」と思って発する「問い」のあり方がカギを握っているのではないだろうか。

著者はこの本で、多数の問いを読者に投げかけるが、1つ例にとってみよう。源頼朝が伊豆で挙兵した時、実は全く勝ち目がなかった。娘との結婚を承諾し、ともに挙兵した北条時政は、なんと平氏だった。なぜ勝ち目が無い頼朝に味方したのだろうか…著者は問いを通じてその時代の本質に迫り、リアルに生徒たちに「その時代を体験」させている。著者に聞いたのだが、じっさいの授業の際には「鎌倉幕府を開いた人は？」といった、おそらくほとんどの生徒が知っていると思われる問いから始めるのだということだ。すぐに授業に使える本だと思う。

『13歳から考えるハンセン病問題 差別のない社会をつくる』 江連恭弘・佐久間建監修

かもがわ出版／2023年5月／1,760円（税込）

差別の問題を授業で取り上げる時に不安になるのが、その問題を生半可な知識で教えてしまうと、間違ったことを伝えてしまうのではないかということだ。本書はハンセン病や、その罹患者と家族への差別の実態を紹介しており、上記の不安をかき消し、授業で積極的に取り上げようと思わせてくれる。本書の特徴は、1つのエピソードが、そのまま生徒に提示できるように読みやすく、かつ適切な量になっていることだ。当事者や家族の言葉を活かしつつ、大きく省略する部分を作りながら、それでいて一読してわかるように編集されている。おそらくもっとショッキングな事例もあると思われるが、子どもが読む教材としてふさわしいものを選んでいただろう。また、子どもが知りたいと思われることも盛り込まれている。例えば療養所での生活や療養所の中の学校、そして親がハンセン病に罹患した子どもの体験にページを割いている。

『政治と宗教』 島藺進編

岩波新書／2023年1月／924円（税込）

副題に「統一教会問題と危機に直面する公共空間」とある。安倍元首相銃殺事件と、賛否両論ある中で実施された国葬が呼び起こした「政治と宗教」をめぐる数々の問題に焦点を当てて緊急出版された。旧統一教会と政治家の協力関係の歴史、右派的主張をもつ宗教勢力の影響力増大、創価学会の変遷と自公連立政権の誕生、フランスのライシテとカルト規制、アメリカの政治と宗教右派など、公共空間が直面している現在の危機を多角的に考察する。

『10代が考えるウクライナ戦争』 岩波ジュニア新書編集部 編

岩波ジュニア新書／2023年2月／990円（税込）

ロシアによる時代錯誤的なウクライナ侵略が始まって長い時間が経過し、未だにその終息の見通しは全く立っていない。この冷厳な現実に向き合い、うろたえながらも自分に何ができるのかを真摯に模索する全国各地の5校の高校生の座談会やインタビューがまとめられている。貴重な生の声の記録である。

『学校がウソくさい 新時代の教育改造ルール』 藤原和博

朝日新書／2023年6月／1,001円（税込）

「学校の常識は社会の非常識」とよく表現されることがあるが、学校は社会の入り口であって社会の一部であり、社会から隔たった存在ではないということを常々意識しながら私は学校での生活を送っているつもりである。しかしながら、学校という組織は、社会から見るとかなり特殊な存在に映っているのかもしれないのも事実である。

学校の先生の仕事とは本来何なのだろうか。「先生とは、児童生徒の、できないことをできるように、わからないことをわかるようにする仕事をしている人である」という筆者の言葉は、シンプルながらも全てを表現しているような気がする。「ウソくさい」という言葉に腹を立てるのではなく、この一貫軸と、常に批判的思考を持ち続けていくことが、学校教育に携わる者として、大袈裟にいうと今後の学校の存亡を左右するのではないかと思わせてくれる一冊である。